特別
イ4
3163
1(10)

詞華和歌集巻第一

春

堀河院御時百首のうたたてまつりける時
はるたつこゝろをよめる

大蔵卿匡房

こほりゐし志賀のからさきうちとけて
さゝなみよする春風そ吹

寛和二年内裏歌合に霞を
よみ侍りける

大中臣能宣

昨日かもあられふりしは信楽の
とやまの霞はるめきにけり

天徳四年内裏歌合によめる

平兼盛

あへてはまちもすらむゆふくれの
かすみのうちにいくへすこゝろ

しめゆひし野をもすそのある

道命法師

たにのとにはるもえしらぬ鶯の
いつかとをあやふやまかくれなん

題しらす

曽祢好忠

星野文庫

雪きえハゑくのわかなもつむへきに
はるさへはれぬみやまへの里

冷泉院春宮と申ける時百首哥
たてまつりけるによめる

源重之

春の野にハ[illegible]雉は[illegible]
[illegible]の[illegible]につ[illegible]や

[illegible]七十賀の屏風に
子の日[illegible]所によめる

赤染衛門

よろつ代のためしに君かひかるれは
ねのひのまつもうらやみやせん

題しらす

円融院御製

子の日[illegible]野へに[illegible]
春[illegible]

[illegible]

梅か枝に[illegible]

源時綱

吹くかせに香をとめて[illegible]
ちる[illegible]

梅[illegible]

大宰権帥

梅かえにかゝりてはなそふりつゝ
あるゝしもきえてやかけにまかへつゝ
影さへもて　藤原国経
とはれぬ人もなきあさ間の
霞みわたるやたなはたのすゝ(み)ん
春駒とゝのあか(?)

俊恵法師

雨ふれは春まつのくゝりはもとゝへる
流れのねこまもしはふれともかゝり

俊頼朝臣

もえ出る若菜あさるのゝ小原
こゝろはおくりきましはるのゝ(?)

天徳四年内裏歌合に柳を　平兼盛

さほひめのいとそめかくるあをやきを
吹なみたりそはるの山かせ

堀河大臣の家の歌合に　源季通

めすゝみかはゝ、とくはるける(?)

いつまてかくるゝ人はまつ桜のいと
あへて梅をまちもとめ給

源道済

かへるさのいそきのやまのいはくらと
詠めつゝかけしあとそくらふとも
花さかりに

源頼政

みやま木のそのこすゑとも見えさりし
さくらは華にあらはれにけり

京極太政大臣下命ありてよめる
りくふからぬ給

康資王母

みねのさくらもさとゝかわらぬ
ここちしら雲とのみ見えやせまし

此歌を判者大納言経信卿の桜
をよますへきにしもあらす
めかしとおほせられ
はかりなと申しつ
かの康資王母のうたにまへの
しけれ

京極前太政大臣

しら雲は立へたつれとくれなゐの
うす花さくらこゝろにそそむ

花

康資王母

白雲はさもこそたゝめ久方の
とこしなをみしよしもかなしき
月も今夜にあふらん

一宮紀伊

あさまたき霞なこめそ山さくら
たつねゆくまのよそめにもみむ

大江匡房

しら雲とみゆるにしるしみよしのゝ
よしのゝ山の花さかりかも

承暦二年内裏歌合によめる

大納言経信

山桜おしむにとまるものならは
華は春ともかきらさらまし

遠山桜といふ事をよみ侍ける

[illegible]雲

九重に立しら雲とみえつるは
大内やまのさくらなりけり

題しらす

成[illegible]

春ことに心をしむる花のえに
[illegible]

こゝにまかりけるに桜のちりけるを
白河に花見にまかりてよめる
源俊頼朝臣
しら川の春のこすゑを見わたせは
松こそ花のたえまなりけれ
霞中花といふ事を人々によませ
給ける　　白河院御製
春くれは花のこすゑにさそはれて
いたらぬさともなかりつるかな
備後[illegible]の山居にすみ

遠近桜といふことをよめる
源師賢朝臣
池水のみきはならすは桜華
かけをも波におられましやは
一条院御時ならの八重桜を人の
たてまつりけるをそのおり御前に侍
けれはその花をたまひて歌よめとおほせ
られけれはよめる
伊勢大輔
いにしへのならの都の八重桜
けふこゝのへに

けふ九重ににほひぬるかな

新院の位におはしましし時百首歌たてまつり
けるによめる

左近中将教長

思ふこと人あらは山をこえ
ちらぬさかりを桜こそみむ
人とみまくほしさに桜花
おしまるゝとそおもふなる

源登平

桜花ちるをしまぬ人もあらし
またもこそ人のこゝろやと人のまつらん

題しらず

道命法師

春ことにみる華なれとことしより
咲はしめたるこゝちこそすれ

題しらす

賀茂大夫母

山さくらこのまのちりやまちかねて
しつこゝろなくちる一條にも

源兼昌

あつかりちるさかへしやみえつらん
花のもとにはくるゝひかりを

桜ちりもせやかてにありけり
とくちるはなちるそれの 藤原元真
あるなこゝろはものとかやと
天徳四年内裏歌合に
桜花風のちらさぬものならは 大中臣能宣朝臣
おもふ事なき春にそあらまし
太皇太后宮歌合のうたとよみ侍
よみ侍る時人にかはりてよめる

こゝなりに硯の高のかけに雪そ今
先ちりてはなるしきりこほりつ
かそ侍るに
とくちるはなのとく庭をつまは
きえともなき雪とさかりにけむ 桜津
俊頼の家の庭に桜ちり
ひまなくちるを雪にたとへて
てらすに 源俊頼朝臣
さくらはなのとたのつのは庭のさかりを
もちりてのよみへけり

権僧正経範下時僧侶乃山里ゟ修道
花もといふことゝある歟
源師賢朝臣下
桜ちる春乃山にハあそこにもと
おもひしに
春乃わらとをもふ道
前大納言経信卿下乃ことく見人
惜もといふことをよむ歟
前大納言兼下
ちるをもとあるハしと乃ちりやしたる神
花まいつるまを折もことくに

庭乃桜乃ちるを惜みてさくら花せ
行乃ゆ
花山院御製
家乃花乃ちるをとちる花を見し
ことつゝいふそのちるを思ひちる
桜色乃ちるをとひくらし歟
源俊頼朝臣下
身のうへにをしむこと思ひいか
春の山やわかせ乃かわりちるかな
春乃海庭
花園左大臣
といふ事ありとみゆる

庭もせにつもれる雪と見えながらかをる
けふやわが身の花のさかりなりける

題しらず　　大中臣能宣朝臣

ちるもみぢ[illegible]山川の
みくもりまよりかへる[illegible]

寛和二年内裏歌合によめる

藤原長能

一重だにあかぬにほひをいとどしく
やへさくらはるの山ぶきの花

麗景殿女御家歌合によめる

[illegible]

空[illegible]のもとよりちる[illegible]
ちるらむひとへにあかしと思ひ[illegible]

堀河院御時百首の歌たてまつるに
よめる　　　　太皇太后宮肥後

さぬ人をまつとはなしに山ざくら
たれをまつ[illegible]

新院位におはしましし時牧馬
よませ給ひけるによみ侍る

関白前太政大臣

咲しよりちりはつるまで見しほとに
花のもとにて廿日へにけり
老人惜春といふことをよみ侍ける
梅後鏡
春をゝしみて年乃をしまるゝわれ
いまいくたひもあはしと思へは
三月盡日人の家のことゝもを
侍りよめるに春くれぬる
ちとせまて行春をしりつゝ
題たをやかにつかふる

新院御製
をしむとてこよひかきおくことの葉や
あやなく春の
かたみなるへき

新葉和歌集巻第一

春

正月乃はしめの日よみ侍る

後醍醐院御製

きのふよりたちかへりぬる春なれと
あらたまのとしや思ひかへらん

題しらす

源能氏朝臣

雪ふかきこすゑもめくりきの春のは
きえつゝやまつ人をまつらん

春風も霞のうちにかよふらん
いつしか花の匂ひぬる哉

ことし賀茂乃まつり乃使をして侍る
あとをめつらしきけふのし人のいはせて
侍りけれは

大納言長房

年ふりしそのかみ山のゆふかつら
かけてそいのるかはらぬ神まつり

神まつりをよめる

源道昌

梅か枝夏乃山かけのかたちにそ
まつりそめけん神のまつりに

郭公を待といふ事を

周防内侍

むかしにもあらぬ我身にほとゝきす
まつこゝろこそかはらさりけれ

夏のくるころ木下の家にまてはる
のこゑもなくてそつゝまちせ
待るゝ物りしかはな

有家忠兼

はるかなるふくきゝていまは本に
待ことゝもたのまぬかな

郭公しはしを

こゝろに待かひもなき郭公
なきつゝいふつまてくゝ鳴ゝせむ

善法院清盛

宇津ふこゝもみゑて待はなくに誰常
乃山に待つかりはいまは

道命法師

山寺法のかはれはかはるとなれは
かゝやこゝのかゝや待なれ

郭公を

能因法師

やまひこのこたへぬ山の當硯

一聲はくにゝかたりきかせて

藤原伊家

郭公ゝそふくしゐより
まきのとをこめぬ人やきくらん

大納言公教

待人はめくるよしもなかりけれ
ふくるまて山郭公なかれけれ
皇子親王とふとも
帰りつとも たまたへしらん

源俊頼朝臣

郭公

ひけるかたに 人しらすかい

題しらす

こやの池の あやめ草 根にかへる
いもかしらす 夜をかさね
皇太后宮大夫俊成
むかしなからよはら(?)かくれ

源頼政朝臣

夜もすからうたてなく小鶴は天のつゆ
あれて根かへりさとのかれ

皇嘉門院治部卿

まいりしを

五月雨乃日ころふるにまさる川
いつ流おともふくしまさる流るゝ
藤原仲実朝臣　まよりけるよら
めぐる
ゆきもとゝ西やのゝみやの五月雨よ
いつくにほすらんあつま乃家
大蔵卿匡房
右京大夫乃ころのきこに家
さゝえたりし難波ちらの乃みをつくし
わかゝめやなの乃まそゝふるらん
源仲実
前院乃菖蒲乃松舎にかゝる
中納言通俊
もらかやそれ鷹乃しうへ村さて
いとゝやしほふゝへ五月雨ふる
右京大夫顕季乃こ家しけるよ
ふかめる
さつきやまちかつきゆふ風
源俊頼
たつとこそまてはゝられてらん
秋もこうむかせ行ゆて花橘を
はつ秋てゆきせ行きまれ

兼盛

宮もりくもちはいかにちらんらし
むかしよりしのつまとるくるらむ
なかきこのもちをかへすらん

菅家経衡

うちよりくつきさにいつれふくこれ
もろともにしくらし
勝右大臣の家の歌合によみ人しらず

順
大史頼章

経まもりしあめにすそことおほせられ

いく千世の末をかそへんしるしにいまはと
寛和二年内裏歌合によみ人
大武二年遠
ゆきはるもきしこそもかなきに
さらにいよもくあらかる
六条右大臣の家歌合に
ましあそる
大入しせ
五月やみ松川よしとうらみの
うきときもいらつかる
水鳥仙源とふ事をしあ

藤原為経卿下
風吹ハ川音すゝしくなる成けり
たちうへきいちよつもる
顕之もと　曽祢好忠
河上に夕すゝみするくもり
やかせのもとにたちとまりつゝ
閏六月七日よみ侍る　太皇太后宮大弐
ことしハゆふへはやすゝし七夕に
あふまのしはしやちとめよ

顕之もと　桐樗
下葉ふ一葉ちつて落秋くれハ
かくとおもひゆる　師乃絵木
むしの絵もみなちらしそめぬ萩はよ　曽祢好忠
秋をとふのへもなむとよ
戸屋の雨

詞花和歌集巻第三

秋

題しらす　好忠

山城のとはたのおもをみわたせは
ほのかにけさそ秋風はふく

津の国のまろやは人のあくるまて
そよとのあはれふかきにあはれつける

僧都清胤

君すまはとはましものを津の国の
いくたのもりの秋のはつ風

七月七日式部大輔資業のもとにてよめる

橘元任

萩の葉にすかくいともさゝかには
七夕にとやとかくらん

法性寺入道前太政大臣家にて七月七日よみける

基俊

七夕にかしもぬきまくそらのかは
きしにしもやこえて星あひの

寛徳二年内裏歌合

左京大夫顕輔

七夕ハこよひハかりをとかしいそくらし
みそきハきかんいまはわかれん
題しらす　加賀左衛門
めすらしくあふよひもなくあさき天川
みきハにわたせもとをきの橋
秋風の吹にし日より百とせもあまりぬるに
よみける
左京大夫顕輔
天河よこきる雲やたなはたの
そらたきもの乃けふりなるらん
寛和二年内裏の歌合によめる
大中臣能宣朝臣
わかれつる朝のそてやまさるらん　あまの河
ひとつりとやととかへりけれは　なみ
七夕をよめる
修理大夫顕季
天河たまはしいそきわたさなん
あさせたとるも夜乃更行よ
堀河院御時百首の歌奉りける時七夕
乃心をよめる
藤原道経
あふ事をハこよひかきりのしのふたなはたの

あく風ぞすゞしきつとめてもさそふ秋

七夕のあまの羽衣かさぬるや　　為家卿

あかぬわかれのまたもまたるゝ

たいしらず　　民部卿經仲

天川のくもぬ水もたえふかくは

うらやましやとやしてわたるらん

三條太政大臣の家にて八月十五

夜に水に月といふことをよめる

源順

水清みやどれる秋の月さへや

千代まで君とすまんとすらん

題しらず　　右大臣

めづらしいおもふのしまの月

かげもしとより照りまさるらん

家にて人々合し侍けるによめる

右衛門督通俊

寿多に…やいつくる秋の夜

月もいつそ照りまさるらん

月を待侍てこよひはせ行月かな

三條院御製

秋にまたあはむあはしもしらぬ身は
こよひはかりの月をたにみむ

題しらす　　天台座主明快

ありしにもあらすなりゆく世の中に
かはらぬものは秋のよの月

関白前太政大臣家にてよめる

藤原重基

秋の夜の月のひかりのもる山は
このしたかけもさやけかりけり

比叡のいしね金剛院にありけるに月を
みてよめる

良暹法師

天津風雲のかよひちふきとちて
入まくをとゝめよ秋のよの月

京極前太政大臣家歌合によめる

源俊頼朝臣

秋のよは月にこゝろのひまそなき
いつるをまつといるををしむと

関白前太政大臣家にて八月十五夜
翫月をよめる

藤原親隆朝臣

ひさ方の空にはあらぬ入てみる霞の
そこにかへりて月出る秋
まつある
右衛門督中納言実家卿　澄覚法師
杉の葉はかたくもるまつ月の影
おきとしるさまさ我ん
月待こゝろをよみ侍
大江嘉言
秋のよの月まつほどのそらはおもひやる
こゝろのいくらひらくらむさゆるらん

月渡山水といふこゝろを　右京忠通
秋の山清水はくまじすみぬる
底にうかぶ月はくもらずする
寛和二年内裏歌合に　華山院御製
遊行ける
擁の花に月にいろのこゝろの
雲井より
道しきを　俊成
獨ゐてながむるやよひの花の

風ふけれはあきの松のみねさえて

萩の葉にそよや秋風吹ぬなり
こほれやしぬる露の白玉　　大江嘉言

秋吹はいかなる色の風なれは身にしむ
はかりあはれなるらん　　和泉式部

夕されは暁のきをしらんは立まつ松
いく秋風の吹さためけん　　曾禰好忠

前参議雅経
をきの葉に秀すきふくる秋の
音よりさきにふく秋の風

霧たちのほる　　源兼昌
杉のこまきの葉に霧たちのほるを山
大江のうらのかすみたちのほる
従二位　漢風野邊の
をかるくきてはるか秋の
深山ある　　右衛門
秋の野の草葉みたるゝ萩の下風八

りとやいはんとまうすともやハ春と
賀茂乃祭ときこえし時帝
花のもとハ挿すかさしも葵
かるまはつゝるゝよみ侍
禖子内親王
神なきにかゝれとふかくいのるしも
かけつく風そきえにとしるや
富河乃清暗ところとりけり
わすれしとまた
源経信
めつらしきとも人もみえぬ
みきハ松もとりはしみしなら
白川乃なる所にて人々あまたを
とめ行けるにまかる
周防内侍
新殿しくらかまへとちかり殿乃枝に
こゝろさしそへしもひそみる
敦輔王
萩乃花ちりけん事とふ人もなき庭を
くさの庭ハことうちてよくあそふる

題しらす　曽祢好忠

嵯峨乃野乃草もゝえ(?)しつくし(?)……
よはにしくしつ乃海(?)ならて……

恵慶法師

八重むくらさしこもりにしよもきふに
いかてか秋乃わけてきつらん

和泉式部

以(?)れ乃ひとつ……はしきうみ(?)に
こゝろくしく(?)梢やとそ(?)のうき
人もし乃かけ(?)往(?)くそく乃はかり(?)

……時免強園乃なゝゑよ……
しつ乃なき(?)……をよめる

橘仲(?)……

あへてよのいろ(?)をも……
あはれ乃(?)……野辺の松(?)……

天禄三年女四宮家歌合

橘正通

秋風よ……
おもひ……

藤原遠(?)……

大蔵卿匡房

あふ坂乃杉ま乃月のなかりせハ
いくき乃駒といかてしらまし

永承五年一宮乃哥合によめる

出羽弁

きく人乃ふとやまそらん岩倉ハ
わか流をとゝこそてらくらめ

題しらす

藤原伊家

秋萩を草乃枕にむすふよは
ちかくもしかの聲をきくかな

九月十三夜に月照菊花といふ
心をよませ給ける

新院御製

秋ふかみ花にはきくの関なれは
下葉に月ももりあかしける

関白前太政大臣家にてよめる

源雅光

雲井よりつらぬきかくる白玉を
たれ布引のたきといひけむ

題しらす

恵慶法師

ことしまつ咲八重一葉のはなかつら
うつろふまゝにめくしもともめ
萬稱香也
草かくれの冬まてさく花と霜露の
なをありてはつこぬるしも葉のいろ
宇治前太政大臣白川にて見ける
宮といふ月をそへ給ふ
堀川右大臣
さきに植る人まとつゆやうつろはむ
あかぬるの色まさりて葉のかをまさりなや

武蔵のくにのかゝりける所に三河
の国二村山の葉をそへたる
栖能元
いろもかはりてめつらしきあやめ
たまぬるいろの山とよ見ぬ
寛治元年太皇太后宮の
三の宮よりあはせ
大炊香
枝なりそふ松はよのいはほの葉のさかえ
まつかせやまつはともしてあり

題しらす　　曽祢好忠

山里ゝ松のこゝの名遠もみぬまて
秋のあはれ葉にかれかゝり
ちらり清滝よ紅葉てけるよ
秋大井河よ乃紅葉のはなふか
く流るゝをみるこそあはれ

太宰大弐

青やまのあやにおきまよふ小萩の雨よ
秋ハもみちのよしさも紅
なか残紅葉ふとふとちるとはなる

源俊頼朝臣

名残なく時雨乃空ハ晴ぬれと
またふるものハ木の葉なりけり
月影のあはき夜もふけまさるに
ちらぬもみちハしらぬな

平兼盛

みれはそれと月もとまらぬあはれなり
秋乃末葉をそ吹きくる風
一條摂政家障子にゑかき侍りける
紅葉ちるひまなくくれなゐにそまる

たるとしつりけるかな

前京兆

秋山のこ葉落ちて個ほかまて
たちそのうらをあくのへかり
錦そ袖をしぬるかな

大中臣能宣朝臣

いつ霜も置きしにしもに知れらいし
時過ぎぬあをきも今も多くかり

承平九月盡といふ事をよめる

前大納言公任

いつくまに松はしくれ人をおほよ
ことしはつかまて
名やとりあへさらむ

詞花和歌集巻第四

冬

題しらす　　曾祢好忠

ちよまき山ちりていつれと思ひしを
神な月月はしくれにこそまされ
散しくもみちをはらふ人もなし
ひとりの庭あらしのけふ

家にて三首歌よみ侍けるに落葉を
よめる　　　大貳資通

あまそそくあらしのやまの紅葉葉の
ちるましく庭をとふ人のなき

題しらす　　左衛門督家成

なをしもかくるる時雨の紅葉をそ
あらしのかせのちらすなりけり

大江嘉言

山ふかみ落てつもれる紅葉葉の
かはけるうへに時雨ふるなり

落葉埋水といへる事をよめる
惟宗澄頼

とまりせぬ水のこころもよとむらし
もみちのもとにちりしつみつつ

其は万葉の下りしさまをかくなる

凡万葉二言ありといへる事也と云へ合

吟ハ古るしのいはれなくと

いひあり其行くいつら地よらん

新古今も並秘伝

かへらかなわれ東は古はむ吟風の

ちるかとくるまく是ハ物まき

多人とも

格ハあさこかしはしくらき

冬よ月ハ今まへりぬ

東山より百年ほどこはるるは此世の

士つれは　大丈夫道雅

もろともにしもくれぬする此世に

かなふのなきちとはさまや

精古の此世といふ事をなし

庵ともふらのとあ優よりも月

くもるとのれいしくれかるなる　睡西法師

天倉の湯時の風情なあなる

萬葉のくわさるる下ゆかるる

平兼盛

みやまにはあらしやいたく吹ぬらん
あしろもたはに紅葉つもれり

慶暹律師ちとせよめる

霞かゝるこのかたかけてかへる石
めしぬ影ゆへしらくしはし

藤原長能

よめる

雅河尻はすてそまされかけれは

しら浪やくすゑの海の波かゝり

大蔵卿匡房

やそ雪んかつてとくらんかり

大和守すけはる時入道なき

大和のもとより雪と見えてら

める

とうへて吉野のやまにふりたし

ちらぬまつきと雪の雪

藤原義孝朝臣

難波つもと

大江嘉言

わらしまふなの昨はしりきゝ

かりうち雪ふり行ける

大蔵卿匡房

奥山の岩かきもみちちりはてゝ
くちはのうへに雪そつもれる
寒夜信をおかしまし時雪中
眺望といふことをよみ侍りける
よしあれ

関白前太政大臣
わたりつる人も
さえ夜のふくる橋の上に霜
ゆきしもそ神世も日の梅
和泉式部
待人のいまもきたらはいかゝせん
ふまゝくおしき庭の雪かな
屏風の絵にゆきふる所
俊恵法師
つまきこるみちもたえたる人のあとの
先ハ人もとをらぬかけちなりけり
曽祢好忠
むまやとものせりつまにみちかへらん
かくのみやまたとも
ゆきへとたえなん

詞花和歌集巻第五
賀
一条院上東門院入内屏風に
ちゝを所
君か代はあふくま川のそこきよみ
ちとせをへつゝすまんとそおもふ
入道前太政大臣
四月一日子うまれたる所人にかはりてよめる
とそよめる
めつらしくけふたちそむるつるの子は
千代のむつきをかさぬへきかな
伊勢大輔
一条摂政家障子にいはひのところ
きたるとしはしめの所
大中臣能宣朝臣
過きうしにはしめていのちとゝまらは
ちとせもへぬすつも[illegible]
京極前太政大臣家に歌合しける
によめる
大蔵卿匡房
君か代はくもゐもあらしのやま
よろつよにあそへのはらとそいへりける
長元八年宇治前太政大臣家

小よある　　能因法師

春の夜ハ白雲のまよひ流くる盛

花の月きのうことふるまゝ

さへて　　赤染衛門

桜花ちりもせぬにとかくもぬれ我

りくの月のうつすまも久しき白

三条院太政大臣の咲しはる風

屋風の絶る花いくとかゝる人あはる

云やにある　　平輔

ありとの月のいるとは木の人ハ桜也

おほくきせといふは

花の人の子三人よかゝりふるとせ

おもひゆる人の目にけいつける

清原元輔

松しまや稲しよせかみる霧の

ちるのきゝに

上東門院御屋風ふ十二月梅乃

ゝまさかにもりいふ

大納言公任

ひとゝもに花をめでゝはりおしかへさ

はなさきそめよ千代の春をもいはひおく

川原院に

かくまはれて哥合侍

松蔭池といふ事をよめる

恵慶法師

たまふのと池の心もたれかふらん

庭しけりやとりける松のちとせを

後三条院住吉にまうてゝ行けるに

よみ侍

君か代のはしらとしてそあふへきすみよしの

経信卿

神のうへに舞を作りの書

後冷泉院にまうてゝ住吉にまうてゝよめる

大納言経信

すみよしのあら人神もひさしくに

松しつくられあはれいくよへぬらん

天暦四年八月廿九日住吉の

合によみ侍ける

後鳥羽院御製

あら濱のまさこの松もそなれけし

つきせぬそこゆる末のちよかな

詞花和歌集巻第六

別

為義朝臣みちのくにのかみにて侍けるに
くたりけるにいひつかはしける
　　　　　　　　匡房朝臣
おしむともあはれとおもふとはかりそ
をしふへきをいかはかりおもひやれとも
わかれはなほやかなしかるへき
みちのくにへまかりける人につかはしける
　　　　　　　　和泉式部
もろともにたゝましものをみちのくの
ころものせきをよそにきくかな
左京大夫顕輔加賀守にてくたり侍けるに
はるはるといつしかとのみ
　　　　　　　　源俊頼朝臣
よろこひなくくるとはいそくらむ
おもへともなほそかなしきわかれなりける
橘則光朝臣みちのくにのかみにて下
り侍けるに餞し侍とてよめる
　　　　　　　　藤原輔尹朝臣

とまりゆくきまつへきかたもなし越路
あはれしれしはしのためには人のためには
播申ける女乃斎宮乃下りけれ
ふともにまかりてはへりてのち
よめる　前典侍道経
ゆこきは経てもとこしてものしきは
ともあらぬ月はつきせぬなりけり
大納言経信太宰帥にて下りける
に川尻にはかりみちて女房
律師円基

ちとせゆく君はいきまさん住の浦
まつのこのはかくれてそ老めし
法印ハ件の宮乃女房乃日向乃国へ下
りけるに餞行とてよみける
一条院皇后宮
あかてこそわかれのおもはしけれよ
なれハ時のまにたえまかましものを
東宮宣旨のかりける時乃親仁人
乃思へまかりけるにとよりくれ
うらうらとして
法橋有禅

別路乃言葉をなく無ゝ旅立也
たゝりうのそてかはす袖ぞ
月影にも人乃もとにやとりけるか
海まさめる日数ありしはなきそのよを
ふ
慶範法師
まことに垂とたえもかしこよりそゑを
こく傍はのちみ命ちくるかゝ
ゆらしへ口望侍りると人乃を
め侍りれいらち侍
康資
はまし

とゝまらんとゝまりしとも見え
いつくにもすみはすまれぬをゝ
人のもとにいひつかはしける
ふしよられ侍りける
僧都清胤
さてなかきれもとすめとぞ
こゝろとへ口わりつれなかるを
大納言経信大宰帥にまかりける時
つゝに侍ける人まかりてはれ
流れゆくなる
太皇太后宮甲斐

是ハまさりたるものなしとかへすかへす
いてんほとより思ひさためて棹さら
橘為仲朝臣みちの国のかみにて下
りけるに太皇太后宮大盤所より
言ひたまひとはなくて
去年ありけるを道遠きめくり
いつとくへき下忌しのとき
藤原範永朝臣ものすかりて
らんとしけるよしをしれ
つかりける
権僧正永縁
左近中将のまゐりにいきの物忍ひ
しうえきあしかゝ
男のつまのまゐりあるへき人の命をたのみて
はかなきよる暁よりたちかくしける
僧正遍昭
いゝなとそれの別のおもひきる
ソフハへとらひつゝへて
かく

詞花和謌集巻第七

恋上

しれの前にてよみ人侍ける

関白前太政大臣

あやしくもわかみ山木のもゆるかな
思ひは人につけてしものを

題しらす　藤原実方朝臣

いかてかはおもひありともしらすへき
室の八嶋のけふりならては

隆恵法師

かくとたにいはてはかなく恋しなは
やかてきえなはあとやのこらん

堀河院御時百首歌たてまつり
けるに　大蔵卿匡房

思ひかねけふたてそむるにしき木の
ちつかもまたてあふよしもかな

題しらす　平兼盛

吉野川いはきりとほしゆく水の
おとにはたてしこひはしぬとも

春立ける日はしめて女のもとへ

流しゆくまし

一條院御製

よとゝもに小さひつくまにふる月を
かくれとつゝるこゝろにて[illegible]
天徳四年内裏歌合に[illegible]

藤原伊家

[illegible]は多[illegible]ふかくさる
つまふきしもおもふことなしは
新院位におはしましける時[illegible]
ことしちとせあまりて[illegible]

とふ月もとよもすがら[illegible]

右衛門督公能

あくまでもながめ[illegible]
秋のよも人のつれなさわすれは

寛和二年内裏歌合によめる

藤原惟成

今あはいかにせむ[illegible]
ふるしぬるわがみ[illegible]

左京大夫顕輔家の歌合に

しはつる[illegible]

大納言成通

よのうちにあらんといひしことゝもと
人はてならていとへしまちふ
歌をよみて　寛念法師
まつりあへ、君ハあらんといつもとも
ふりくるゆきの人やさつりみて
つまなきさ女はなれのつゝける
賀茂成助

いつらの人のつきもといひしく
うき身はなほとゝのやかさせて

右衛門督成通のまねはうこ人今し
侍りけるよしをなり
右京輔保

めすなるへきと葉はなるかたに
ふしとしふかのかふらう
歌をつるを　浄蓮法師
もなしためにつゝき人をいつきゝなん
かりのつとかき花とやくらん
女とてあらはすいひしも
はての花のなかしとて取りのまゝ

てうの女のもとにいひつかはしける
平兼盛
ほとゝきすやとにかよはゝつたへなん
しのひきてなくほとはいつかと
定しけて　友人次
年ころすみける所をいてゝ
ありねおもひいてゝ家にかきつける
儀めるいさみてとすへしと思はゝ
こゝはよろしくもたつなみはこりゝ
おもしろきかたはらにいてしもあき
そのまゝにつきもこよひもあかさなん
能因法師
ひとへなるすその袖やはなれけん涙を
しくふききしえてぬ思ひ
あさくしくしなかまつる女
ちとせいのりて見せはなるとも
小さくなりぬるてうきこゝろはつる
く然いかはなれはさ月へて
おもひあまりていのちつきぬる
前大納言公任

ひとりのみ思ひくらしつ在井戸
いつはあらくさしつのもとに哉
三井寺にてわか所童とも京に
いそいてもとつくりと契りて
侍りけるを京へ出てかくといきを
かき絶とももとまりて侍るを心
まいは流りしかの
僧都覚雅
新しくぬ君は恋しき月にや
出ても人はしもしまた恋かり

せよ小松すきとなきぬ女より七
月七日流りしくなれ
大納言道経
七夕まつれひくをみつの衣もと
たのむらむきとかへりやこの面
恵のなみこそかな
隆源法師
秋のにほとせを思ひきつかぬると尾や
低きとなきは人のとくてくなるへん
大納言中納言の侍従の山荘

ふみ僧やわ恵とふゝことにあるしも

夜つゝもかふしらハふくさくき

ふ

こゝの事しれりをさけゝるゝさ

冷泉院きよ者りのわるらかう百元

ふこんまりゝゝさよよある

源宮えく

風きいつ是ひろふへのひとの家

くるうそ物らさゆとかとふへる所

殷河院清野百えふもとりる

りはなけれ

皇嘉門院別當

なわるへつ野乃はぬなや

おゆひいきてもい

式子内親王

たいしるは

年緒畢

おほけなく袖ハ清わの闇ふゆや

くふりしふゝしまぬりるふき

右家小実

いつろりらつくちの待来

わしまをあり思ひつか

寿りふみなりみをつとあせる

女のとこも見まし人にかへれし
ちいのつりしあれ

道命法師

山桜あつねにし咲へき物ならは
人のこゝろをつくさゝらまし

嵯峨の院にて時花人々まうてたる
小野皇后宮の御方にて
れし女房のもとへ
ちとことに人の橋のとゆすくし
華の難もとしをまたにしたかへ

源兼澄

ふるさとゝめぬ人のいかにこゝろのりけ
おもひつゝまためくしきかな
花の女まよりて

大納言公實

きつるまくのかりめ色もなく風を
うつろひしやむ秋とふりしは

中納言俊忠家歌合に詠人よみ侍

前京大夫顕輔
おのこゝろ人のこゝろへふもと世を

しのふるのかなしきものやと

題しらす　源道済

しのひまてと御かへりこときこえける

物おもひみえてはいまもへりくらまし　有

文なかしのくるまに女のいひおこせたりける

くやしきとこそいひしかいまはとおもふ

信みれはいとゝつゝしくらみれ

源兼光

あはれとも我身のうへにおもひしを

かつはいとひ人のこゝろのつらさは

くるしとも人にしられし

左京大夫顕輔家の歌合に

平実重

逢ことのかたきを人のつらきにて

うきもつらきも人のこゝろの

またしとおもへはしられける

物おもふこゝろはいかに君しらは

つらしともたれにいはまし

藤原道経

嬉しきはいかはかりかはおもふらん

うきハ別のなかりせハ物のあはれハしらさらまし
逢坂の山にこそ今ハかゝりけれ
兼覚法師
恋すれハうき身もさらによそにかはりけり
わすれしとおもひしかとも人ハかは
題しらす
人しれすものおもふかなさくら
大中臣能宣朝臣
ひとりのミ行つゝ物をそ思ふなる梅かゝ
よみ人しらす
かたみこそやかゝるかりにむかし

いつしかとまちし桜の咲ぬれは
宮こにもまたくる人もなしとこそ
とくるゆつらゝ
藤原義孝
かしてもそこひなき心のうちをしらせはや
あはれとも
関白太政大臣
かせふけはもみちのちるを
藤原朝隆朝臣
風吹ハ花のちるらむ
なかなかに人をうらみむ

題しらす　　新院御製
せをはやみ岩にせかるゝ瀧川の
われてもすゑにあはんとそ思ふ
　　曽祢好忠
惜まるゝ志つの雨りけるたかきよりなき
人をしもおもふのみならす
名をかりてよみつかはしける女
小くらのさとにすみけるころ
　　道命法師
ちるとも[illegible]くまことに思ひけるのみ
こゝろもとなきにまちかねて
寄題読侍りけるによめる
　　中納言俊忠
恋つゝもいとせめてはなれまし
おのかみたまをさりにや
　　喜多乃[illegible]紀

詞華和歌集巻第八

恋下

人しれすまりてもとゐらはな女のもと
とへゆきてこゝろとゝまりたまかれ
かゝやいふらむとそといふ出あらは
はかなきあはいそれつまさへたえ侍

藤原相如

あふことをかたもふこのかた天多
いつかとりこゝろにやりけて
嵐はらつきもと

藤原道経

我恋はをそきしれぬはまつかなしき
さつ浦のちりの波のよるこそとも
女のもとより暁にかへりまてたち
いとつりしかれけり

清原元輔

東とふのこゝろまてしるしてられは
いはくらわにしとくにかはらそ
左京大夫顕輔の家の会に侍る
くるしにいまは

藤原顕広朝臣

心をハとゝめてこそハかへりつれ
あやしやなにの[illegible]まつらん
女のもとより夜ふかく帰りてつかはしける　藤原実方朝臣
竹乃葉に玉ぬく露にあらねとも
また夜をこめておきにけるかな
七月乃[illegible]
[illegible]女乃もとより[illegible]ける
読人しらす
見る人の[illegible]
[illegible]
右衛門督[illegible]よめる
藤原範綱
[illegible]
[illegible]
藤原保昌朝臣に具して丹後へまかりけるにしのひて物いひける男のもとへいひつかはしける
和泉式部
我のみや思ひおこせんあちきなく

人はなくあらしきあなきこものまくへ
物いひ侍りける女のもとへいひつかはし
ける
大江為基
思ふ事ありて色めるよ隠井に
いかにしていふこともなくとまりつつ
よそにしもきけとも秋の男秋
立ける日夜ふけて涼しきに
見まほしきは我よりいひつかはしける
一宮紀伊
ほのかにもかくてわかれし風の露
こよひや秋立つといふらん
女のもとにまかりたりけるに秋の
いさこむれいといふ事をかへしまき
といひおこせ侍りけれはよめる
坂上明兼
秋来ぬとおもふ思ひのなかれつゝ
きつゝよいかならふ物とてき家
能宣もと
恵慶法師
冬きてはまつにあめにはしほれつゝ
いよくらのもとに見えなくなるかな

尋逢ぬ人といふ事をよみ侍る
右大臣
いつまてともよくつゐとわかれ路よ
かくりし人のあはれ面影ともの跡
男にわすられて侍りける頃小
いつきのうちに赤染衛門の朝臣
ちとせまでよみにあかめてよみ侍
赤染衛門
あるともにかはきみる恋の跡かな
たのむ秋の夜をまちてよまし
題しらす
曾禰好忠
よるともぬれてもあふことをあはれ
みなとの舟もゆかりけるかな
舟人の行かはりて難波
まことにいふすきとあまの住なる
しらぬ人のかは
関白太政大臣
こめ人をとふこともいつしか思ひ
うつりかはるにもなそらふともや
題しらす
和泉式部

夕されは物おもふ事侍りつと
なからこゝに人のとひけれは
月のあかゝりける夜
まかりける男の立出てまかりけれは
秋ふかくいひつかはしける
涙をそへてくるゝとあかつきの
こゝろはしらぬ月をみよとや
返し人のこゝろは
つらしとて香をもて人をとめくれは
さなきともまかせてやりつへき

平兼盛

年毎やとおもふの色給ひけるに
まつしたゆきて花ちりて
身をみなわけるつゝの秋なくて
人かなへあらしとそおもはれ
はるひとしくかへ侍るもかれ
たかりにけれといのつゝかはけ

寂蓮法師

見わりの暁のさつしのゑにとも思しかれ
うまりそやうつや色のかとのた。

宿のめならぬ男もとやくと侍る
ことすみける竹の葉に書つけ侍る
うるまくゐにてきくそぬら
和泉式部
竹の葉にあられふる夜はさらさらに
ひとりはぬへきこゝちこそせね
絶えくたよりなきおとこのもとへいひ
つかはしける
相模
たまめるもくるしかりける命
人のこゝろをいつまてか見む

通ひける女のこと人に物いふときゝて
あるにいひつかはしける
清原元輔
うき明りとこれに物のあはれさは
なにとうきわとおもふとありけり
久しく音をせぬおとこのもとへ
祐子内親王大進
恨ぬるおもひをうしもときく咲かの
ふかまとくて
折しりてきまうめ細
男の絶えくよのみちの月はいはと見え

たゝ人の名をとりけるにや
高階成忠卿女
思ひやきこえけむ水のしら
なかなくほとの心はまをもと
いとゝしくまさりける心の大僧
正になりて後へまかりけれは
つかはしける
律師仁猶
やまひをしてものをかきえけるも
昔のみこひしきを思ひ出すれは
なかなかなりしかは

大僧正行尊
うくもはいもりのやまにかよひけれは
昔はいつもともにと思ひしやいかする
古寺門曹世高僧正月乃晦日の頃
いたりしめていつもの事なりけるに絶
えぬ昔はとこうりの後はまゐりて
聞ゆとの事ありていとうらみてなのめには
ねむといひをしけりける人もなかりける
皇嘉門院出雲
東をとりて見えやすれとかくれなきみれは

あましりわの菊もさるらしかのく入ぬ
前参議仲実(?)いまはたゝおもひたえなむ
あらぬ恋とふるもとにある
中納言国信
冬きぬと風のまへにしつかにも
あさいしぬとし人いふかうて
くるゝ夕しかたいとゝもとしてかれ
藤原仲実朝臣
野中の清水ゆくすゑやいまは(?)
関白太政大臣の家にて(?)

藤原基俊
浅茅生にたちかへりきては露もろく
うれしよし人の玉やきえなむ
いつかはたるる人はいかにつらき
まてしはし[illegible]
清少納言
よをこめてとりのそらねははかるとも
よにあふさかの関はゆるさし
源
ひとしくおもひそめぬる[illegible]
人
うるゝ
つれなさはいつもかはらぬ[illegible]

人をとゞむることもなしとしてあるかな

中将道信ときゝ侍りけるにつかはしける

よみ人しらず

人をとゞむるこゝろもなくてまたれける

人をわするゝ事もしらぬをあふことのなきにつけても

中将道信

雨ふれしらぬ事をいはむともみなかくしつゝ

人をまちて

おほかたの雨にぬれたる男のもとへよみてつかはしける

和泉式部

いくへともしらぬ人をうらみつゝ

うらめしとおもふこゝろはなきものを

大江嘉言

わすらるゝ身をうらみぬる

相模

夕暮はまつにもまさる物をいまはたゞゆくらむかたをおもひこそやれ

題しらず

よみ人しらず

まちつるくれの人のかよひぢを明くればわれを

ひとりきくらむ

詞華和歌集巻第九

雑上

ひさしとのゑもとく四季よせて人ゝ哥
よみけるにまいれりの春をかなしと
らん侍　源兼家朝臣
春霞たちかすむらんやまの国ふ
ほとけなきしきのはなをうつろはん
藤河のはな時人の木のもとともに住
あはれにかゝる雪世をわたるよ
よみ侍　源俊頼朝臣

にしの海より帰りけるに
まちしこゝろまぢかひとこそあるけれ
おもひの法師百首哥よみ侍けるに
らゝよ侍
住吉の松のしつえをくゆるて
うみのいつはりをみるをしも
備後守にまかりて三月ばかりに
船よりのぼりけるに仲の院は岸
とく一下りに参議為通朝臣ゆきは
松のあゝゝけりとやそ流かうける

平忠盛朝臣

ちゝ井ともふ頼の也とも咲なん
なかしもなつねくいつくしなむ出て
旅ねしあまの世祭のにに桜も
乃とゝ乃くゝる下にやまかせ給
人ゝまゝ世行かれ

兼昌院

平経宰とも人とともいちと可経
平安大係人ゝまゝめゝきゝ雨
人乃もくまゝゝに桜花

ほく咲てはるれい飛よ盛ぬ
乃しもへいれつ係

天台座主慈円

ちるぬ乃に事ひとゝ山人そは
もりしとさゝつもも木そし
もとと花れ山とよ係

大蔵卿道房

春く絵いあり上たく山ゝ
ゝまゝるとしにねさのタそ
宇治の右大臣大下もみえ山ゝにはつ

ときゝて侍りける

堀河右大臣

をしとおもふ心はいとによられなん
ちる華ごとにぬきてとゞめん

二條関白しら川へ花見になん
といはせて侍りければよめる

小式部内侍

春のこぬところはなきを白河の
わたりにのみや華はさくらん

入道摂政八重山吹をとて侍りて
こゝすかへるといひて侍りければ
よめる

大納言経信母

たましひこのもとはとゞまるめらで
とへとそたれもやまぶきの色

新院位おりさせましゝ時后宮
のはるこゝろにのれむらさきの秋
ことしもとめて若菜えんとふ
ことのよしをつかまつりけるによめる

大納言師頼

春日山きしの若菜にいはひしりり

きくゆゑしとはいふてきこりすまし

源至更衣嵯峨天皇の孫ゆゑ

はかりける時人にはよらて右近

のむすめかはりて親王にゐる

まゐりに従五位の女房車

よそ清てまてし歌しるよ

見えなとしてあてはつりは候まゐ

まてゐるりの女車より

見まゐこゝかはらやくゐのほとりにをかゐ

和名のうちとゆふへゐゐ

これなむをとれはほたるかはなる

勝左大臣

和名のうちといふまきうちなけれ

あまこのかはりことたかまふきまし

古今撰者也延喜の帝の御時見ては

りてなりて人にまゐりにあゐ

右京大夫源季氏下

こゝかりつゐねきくはしきこゐ

たきめゐしりのさたとゐすれ

秋風従りよりまし日はなれ

水草隔船といふ事を人々よみ侍り
ける　　　　　　　　大蔵卿行宗
あすハ江のはしにかよへる浦人ハ
とまりの舟ハこゝろなりける
題しらす　　　　　　律師済慶
思ひきやなかれてやまぬみなせ川
まさりしものハ月ことにてハ
文治六年信濃守すゝめ侍る
ころともし小夜もすからにてまつ
まもなく　左京大夫顕輔
堀河の院の家にて

今ハ侍りけるにかへるといふ侍
右京為兼
なかきよのうきハねさめの山のはに
しも月いりかたの月いつる
月の出るはいつくの西へ人のまて
きそふあかれ侍るによるの月入る
いつまふつきてをのへに世そかはる
としあれハしるかも侍
大中臣能宣朝臣
月ハ入人ハそらなるハともりけるかな

猶やみハいつもとふりの世と
浮うしおもふ世絶て藤原
乃心より月乃ひかりて何ゆゑそ
侍従て思ふせ給へる
小一条院御製
いまはゝやとかる月はなかろう
きみある人乃心けかりける
右大臣又那獨中文竜よそ給
かる時下藤よしふるなと
きゝて宮乃女房乃中に所

名にし中たえまある光りまに
ともふくて
右中弁思ひふ入みそしや海
とこしへつる月をも清みのきかれ
思ふ月ともふきまるとな世絵る
新院御製
月清き思中にたえぬるから居乃
心けつけり思ひをかるなり秋
新院信よおもつしまつて時なる月かゝ
あらく何なる女房よつけて

しもよるをはるかなる

太政大臣

まつのはる月あかゝにをくを
雲の上まて秋くころつのかせ
あけゝる家にも月のもまゝに
るもとそみゆる

良暹法師

いつまても月のもるへきところかな
やとはあらしてさえへかりけり
難えつもと

内大臣

くまもあきさのよのもなかの下露
ちる秋のうへをとへゆく月影
山家の月をとゝむる

源道済

ところしとこに家出めつき山里と
こゝろの月のあかりをもはしらぬ
旅人の風にまかせて海の月をい
ゆめことゝそらにみゆらん

平忠盛朝臣

有明もあかしの浦の風にへはしこそ

雲のゆくへちかく月をとゝめての影

題しらす　權中納言義忠

天の川とほ渡ち出てゝ山の端に

いりますえく月をなかめつるかな

堀河院御時中宮の御方にま

いりて女房に物申し侍りける夜

月のおもしろく侍りけれは夜のふくるまて

見えし女の月はいりぬるをいまも出

ふれなるもみるとしのふれはなるらむ

大納言公実

あすみれは待つめは出る月ふれと

いつちをころりゆめせとくるへ

題しらす　華山院御製

わかみにかなりぬ月をとみてそいかるらむ

きみやとふととめよむかしなるらむと

月のおもしろく侍りける夜大納言

公任まうてきて侍りけるにともにありける

事ありてまかりてそれのちかへりけれは

きのふうらみて朝つかはしける

中務卿具平親王

うらめしく袖のぬるるに月夜まで
こぬ人をまつのとほさきかな
曾 風の緒に山桜にあらて
月ころみ人をまちけるあるよなる
大江嘉言
ひとり山路しら雲の衣のまてまたよも
秋風にたなひく雲の月のさやけさ
高まつ人今はゆふ暮をまちあかし
左京大夫顕輔
よもすからかすみのそら月もなかはのそて
清見かたきよきなみより月かけを
山城守 ちるをしきなかき月のあれはなりつ
月の影のかへる 東まつて
まちまけるとは人のいつはりとこそ
はなしとなりにしあは
右京権大夫頼下
しら雲のいくへの山をこえぬとも
こころのうちはなかれて月をおもふ
久しくも見ぬ人の月のゆくへを
つきて夜ひとりつつ月こよひかな

中務卿宮

月すみのひかりのかけはかはれとも
ふるさとをわすれし人はおもひもや
やましふかきすまゐのちかくなにはに

宗尊法師

よそにてもなほすみかぬる袖
それはなるゝ山の月見るにも山
ふかきしのすゑわたりとかへるある

雅覚法師

いにしへは思ひ出よりもまたけふよ
あはれとも見えつる山の端出る月

前摂政太政大臣家歌合によめる

大蔵卿有房

大坂のせきの杉原しらねとも
月のゆくゑはよそにたえける

藤原景綱

よりうつりかはるまことのまかせに
こゑたつる雲のゆききのよそみても
よそにあはれはける月のかけなく
なるやまの秋はいとあはれ

帥前内大臣

はれましくもあきにてするやすらふとはなれは

月はかはらしあすのよも秋
なかしまて　　　高松上
梅く入てもえいやとかはふし山の峰を
いかなる月はいつまてあるらん
たかはよつもとことに男の男のた
やまとくあかのひとふくれいある
　　　　　和泉式部
もとのめのかたとのなにかしはらを
おもふく橋をわたしゝまさん
思ひける男のいつ思ひわれて
月五日節会明て後ありて宴
夜あかくはあるあるいてきさと
ひかするかよしにたかなる
あやめ草わにも橋ゆへ
のあやのつまとや人なさるらん
保昌にわすれられて侍りける
比茂麿紀下のもとにてはへりて
きえはかなる
人しれぬ思ひかは木ゆふ手かは
むしのかきねのまきしふれれい

出雲國のかたいつる女をとかく
いひわたりて後神無月のころ時
雨ふりける日何事とかありけれ
ばかうしたるは母の男のもとにいひやり
ける
出雲人しまと
思ひわびぬる雲のかきたえるかな
我しくれの神無月の時
遅きもなく行過河絶河
あふ人は時雨にあらぬものの身かな
来ぬとてこえしく執しけれ

出雲なりける男の宮司に思ひ
けむまうしてきまかいはなれ
よみ人しらず
たの雲ありけるかいつき郭公
かくさらはのたれなかるる
たのみたる夜のなきわたる男ち
ほかにあつまをばかにも出あひ
まろうはいひのほかにつきにこと
をもしきつくふとさめかれはなる
かな
津守國基

よしさらはつらさは我にならひけり
たのめてこぬはたれかをしへし
[illegible]男のたのめて[illegible]
[illegible]
[illegible]
江侍従
[illegible]
[illegible]
題しらす　曾禰好忠
[illegible]君[illegible]

[illegible]
[illegible]男の[illegible]
[illegible]
赤染衛門
[illegible]
[illegible]思ひ[illegible]
[illegible]男の[illegible]月[illegible]
[illegible]
[illegible]
和泉式部

梅ハ匂ひおもふ人こそともかく花乃心
まことにハたゞ心もみえたる戯れなり
藤原隆時朝臣物いひ侍りける女
ちかきよりハ来世にまさりぬ女
とおもへるのみ女しのびつゝ侍りしか
藤原隆時
あるかハいかなるふしのはらはりも
さとの乃こハ身にしむつゝふるらん
相模
もとみよしのちるくなりたるほとに

かつきにまさる人ハあらしかな
物思ひける頃しのひあへ侍
大納言経信母
かくるゝ事もあらしとおもへるに
ニ侍りける物もと思ひたまへ
木ものかけ侍りけるのをまちて
侍りしいとゞもものへあそびて
有明乃月のあはれ侍りける
よろづくし
はかなけれとみえなる
赤染衛門

神無月有明の空のしくるゝを
またわれならぬ人やみるらん
しのひよ物になりける哉
出羽弁
君ふるともくるしからまし数ならぬ
身はいふかひのなきになりなは
志けゐける男のかたりけるを
しはしとそとものはなれかね
和泉式部
たとへぬくするものとなるらく
ちるまてはいとはぬ人もなかりける
おもひつゝねにしかたに道をしらなん
ふれは明すまくらとしれる男
のこすまゝにわかの
大弐三位
人の世しつかなしみめくる物ならは
忘れしやところみてまし
影をしもて
右大将道綱母
たのふくにとくみるこすをうつる
こちふかれのこる見えくなし

長元八年宇治前太政大臣家に歌
合し侍りけるに勝方の人々
住吉にまうでて侍りけるによめる

式部大輔資業

東よりしの浦よりはるかにも
神のさかしき住吉の松
猶ゆふかけてまもれとぞ思ふ
ちはやぶるもとつ人のさか木葉を
きみがためにと祈るなるかな

周防内侍

いかにしてかくもかく見ゆるかな
うきふしにつきせぬ世をかくて
谷風にたぐひてなびく竹の
竹とともにすめる

善法法親

今宵をもふける竹のこゑ
かはらぬ色のよそにて
法名

谷風法親

年経ぬる竹のよはひを返しても
このよをながくなさんとぞ思ふ

おとこちとうらうこそよのあはれ

和泉式部

忘れじと思ひぬ山のみねつゞきよ
おのみゆるものを人のあふさきは
津の国のこえへとて前まこもで
あ大納言公任へいそつかる

能因法師

ひとかゝに山田もるかもとさかぬ
人のこゝろ人をおもひそめわかの家
後一条関白とのへまかるすゑ

つらきけれい家の内々ふかきあ
へもとう出けて豊原乃井にい
さいけるる

源仲正

見もとる山をさめてはよくらうへて
かうまいともきよみの下かる
老やとてきはけてこそまれ待
かるもとに藤原顕覚之まいし候るし
あかけれいそのよろこひ人
月くりをまうりそよあはれ

平教経

君にのまとちらふましりハあやめくも
いつあるれとゝの人なかのけまし
長能朝臣乃おほよしとのあ
おもひのゆくりし
源道済
明石とききてみれ
瀬を早み ゆくりし絵風ふきて
乃ちの宮乃伊せそこ乃ほとりける
また けく瀬乃 松乃もとにかける
あへて くる 橘為仲朝臣
あへハ海尾ねもけく瀬の波
まつとハたまにはきよと思ふ
左ふしつゝ待ちの宿ちまち白妙の
乃条に在のそゝけりにありける
事ちとかそくらに雲ゐける
左京大夫顕輔
くれの沼菰於末葉乃ありてきハ
たゝいゝる乃月のたゝいゝれ
師於内大臣
なかしくてこゝろのおはしますとも
ふるとはむかしれよとありてある
二条院讃岐

夜るの露かりのやとりにいくたひかしかなみ
こゝろとそもちかすまくらかな
堀河院御時百首歌奉りけるに
くさ歌
大納言師頼
月のひかりは色もかはらすおなしなれとも
いまはまたまちかねてあかしけり
大蔵卿匡房
里はまち下くたりまてといはまの
むかしのこゝろはしらすなかれてやまの
影さすまて
大納言伊通
とかくのわかるゝまてにあはてのこそ
跡まてまとはしとおもはむ
小野宮右大臣
わかしのこゝとしらすしてなきわたるなを
清原元輔
老そ枝をかくもとせしの心ひきよ
年経る人なもおもひとちり秋
たひしに
賀茂政平
ゆきもゆきへりゆきてくさ
よそふ月かもあへりてしものし

新院位にて百首のうたたてまつり
けるによみ侍る

前東宮道郡下

いとひても猶おしまるゝわか身かな
ふたゝひくへきこの世ならねは

神祇伯顕仲ひろ田にて哥合し侍るとて寄月述懐といふ
ことをよみてとこひ侍けれは
よみてつかはしける

左京大夫顕輔

なにはえのあしまにやとる月みれは
わかみひとつは
しつ海ところけり

詞華和歌集巻第十

雑下

のりよしと使て男ふしたかふこと
いぬとこそきまりてよめる

源俊頼朝臣

男ゆゑなく山ねもとへつゝ世中を
いくうれいつるうしとえそあ
女ともかきにかゝる橘とかくぞ
よみ侍

きしのめつゝ思へはゆきとことはにふる
いつまでかくすきこゝろなん

四位して殿上おりて侍りけるころ
鶴鳴皐といふ事をよめる

藤原公重朝臣

むかしみし雲井をこひてあしたつの
沢辺になくや我身なるらん

新院六条におはしましけるに月
あかく侍りける夜東宮にてよみ侍
月前述懐といふことをよみ侍
りける

右近中将教長

ふるゆきはきえてかつもつもりぬるや
うきをもしらてたゝ風にのみ

桜花のちるをちるとも見えぬかな

左京大夫顕輔卿

ちる花よまてはしはしとあらしふく
つのまちかねて花さきぬれは

左京大夫

なかめしくしなかきはるひにちる花を

撰基法師

はるのきぬらしまたは花のもとにてそ
なほくしくさくらのさきそはしめなる

いつくにもきえぬなかめの

花そみえける

秋の野を過ゆくひとをしたふる

おもはれくもかなしきかな

源親元

花ちりしきゆくはまきのいろこそまされ
かへりこの野辺にしつけみまほしく
心にかかるうらはしかれなりけるよ

みゆきける

よそにみしくもゝいろにまとはせて

二条大宮

をのかさこそはなにそめてかへりけり

春はらくあ風とせ絵にかくらむ
ら海を絵にかきてみれ

寂蓮法師

かくしつゝとはいとうらんみよしの
くやしき事のいはしらうらめ

大江乃ゆめ音をやすらふる

和泉式部

夕されは物すらしきのかきをとせ
明らもきくへき分とゆるゝ人

大納言忠教

何るらうき夜

まち常乃あめをゝもとむるか

有家朝臣

常乃ふくらむらろ乃ほりの中
きえもやはにすゝむかれ
いつとても事乃ことはりにすゝまん
此比ゑた

法橋清昭

見ぬ人のこゝろにかしらぬ
いつまてかにきくらむとすらん
夏の夜は出る
に夕やみのいとくら

ちとせ句

神祇伯雅仲

世をし身まかりし後ハくもさに
あかれいふるやこゝのまとめて
唐衣かくはなれける雪乃原
ちとせくふらあきす

三羅道法師

おもひあまりかねぬ道をたとる乃山
雪ふかくふりこしへとすへし
大江峯閑給へおもかけひとへき
またまかくはかしいふる句

参議兼門

かゝるへといへる人ハいもとゝかりて
とゝこしつ拝みとかなへき
唐衣かく織付ふかけしハ三井寺ふ
またりて京乃唐よりえ見そ付る
かゝる所之紅梅ちとせいまハ華咲
めかんかへりやとしれかれハ折ま
けかうてらみせかれしいかある
大僧正となる

世よりハまつしもおよきまし　梅華

ちりくるまへとこゝのつのうちに
その後程なくみまかりけるとかや
人丸をとともにつたへしける
赤人　しかも
このもとはいかなるはかきものと知らず
流をえんこともあしとをも
猿丸　しかも　僧正　しかし
なかおもふ事のいかなる事かな
さのたのもとのまの千載にものゝ
大伴家持

あしはらのしつかにとをのくとゆく
ら流のかたきに名やすまし
大友にとゝむめかる此後撰和
下のもにいれつかる
喜撰法師
あはれやとすゝ侍とふ事六
なかやとのゝよろつの侍
たいきをも　黒主にほふ事
あやふの歌のうちのことのとゆめ
よものとうきめふりとふ也けり

此集撰し侍るとて家集こひて侍りけれはつかはすとて

太政大臣

思ひやるこゝろの水のあさけれはかきなかすへき言の葉もなし

周防内侍

恋わひしなむとききて
流れてし[illegible]

大蔵卿匡房

かはらすは[illegible]世のやまと[illegible]
うらやましくも[illegible]月

清輔よみてのち左京大夫顕輔
か[illegible]

寂蓮法師

物おもひ[illegible]
おもひつき[illegible]

登蓮法師

[illegible]人[illegible]
[illegible]

皇太后宮大夫[illegible]
[illegible]時大納言の流れとも[illegible]

しくをかれにし道房よりいひて侍ける
きは遊ひにまかりて侍けれ
ゑいつのしるし

太皇太后宮肥後

はくふ山いくとせともかくもみな
ま海ふのしにはの事をもわかれ
下﨟にまかりて　摂政関白
もとにはへりける人のもとへつかはし
しかもそとかへりて流れける

大中臣輔宣朝臣

としへて星をいたゞくくろかみの
人よりしもになりにけるかな
白河院の御時よおかつし殿上
歌奉よ流そえまとらる事
侍けるにとさ宮内の女房
名れは冬のはつしくれ

津守国基

雲のうへにひかりやそへむくれ
まつとこしへにすめる桐やまのすみぬる
九
隆経大夫影季

ときこほることハあり殊と信りぬ
まつこゝろはやくしかはなん
新院信よりしまうし侍しも人
のおのことしもとめしらく盛信乃子
まうせ給ひける白川院乃御事
まするはなくおほしけりい

大納言通

しら河のおほんときより新院さる
能のハ二代ましくそそしるへき
後白河院の御時百首のうちにある

大[illegible]后

もとせせハ一筆にやとりてはしくてまる
すせハ鎌み夢をみたりける
新院信よりおりしまししみず中宮
文乃女房ハりかなき九はまりさい
ともかして上達部乃おほのこ
ともちとくいはまておとかつけて
おもをよみかくしおほよふ中宮乃
御方よりてしき給ひけるもとにて人
よとめたてまつりてふかきにくる事

ことゝいとゝもまつのくもゐなりは
流かゝしきまる

新院御製

久方のあまのはらかわりても
うみるしいかにもむなしむ
たもとの袖のけしかるたり
まちつけし君か袖

源義[illegible]書

春霞たちのほるらむかけすみの
つくるのとまりにみえつるえの

太宰大弐[illegible]みかさの山にかゝる
くもる時とはきこえたれ
けふこそ空にはれにけれ
かりかね

関白前太政大臣

木のもとのよるはたちなかれ
さとしかれはつ雲

新院位にましましし時海上
遠望といふ事をよませ給ける

和田の原こき出てみれは久かたの
くもゐにまかふおきつしら波

後冷泉院御時太皇太后宮にて基方
御屏風よ倫中たゝくゝひな
あまたの人毎つかうまつりける
而よよある　前東宮亮経卿
うちぬれて二人金山よつもりぬ
まつたのあるゝかはとこ草乃也
今上太皇太后宮紀伊方御屏風
さゝ色によそへ山の上面にねむるは
くかまつかへまし足をゝ人のこゝろ
みゝまちまる雨よなみ

左京大夫顕輔
ひとくの山面りつかへねかはとこ
おくとまりてけるよあち紀をちかまつる
鳥羽院御時帝の御屏風のわたりに
年のをうを行かるよそひなる
曾祢好忠
水上ちとゝいそくれもんちか
わすれぬにそたのむかち川の水
ありまえのはかなきかりけるなはる
宇治前太政大臣

いまやとてまちしもしるくあさかほの
まつく風人もあらしといふ
紀貫之
こよひもや秋のよすからまちてみむ
有明の月のかけをこそみめ
道因法師
おもひわひさてもいのちはあるものを
俊恵法師
よりくるはすさへつれなかりけり
徳大寺内大臣
ほとゝきすなきつるかたをなかむれは
たゝありあけの月そのこれる
俊恵法師
よもすからものおもふころはあけやらて
ねやのひまさへつれなかりけり
右京大夫顕輔
かけもよし
やまのはに
藤原親隆朝臣
ゆきてみぬ
さやかなる月をみむとて
てらしける
つらきとそ

前京極摂政家歌合

むかしみし雲井の水はかはるとも
うつりゆくけしきをへだてぬ
陽明内大臣ちり海へゆきける際
ての尾もとしつるもえなく

大江正言

思ひ出もなきふるさとの山なれと
かくれゆくはたあはれなりけり

三条太政大臣多ゆうりて風月
ちそつえてへもあはれ

前大納言公任

いにしへをこふるなみだにくらされて
おほろにみゆる秋のよの月

むかしみしよをとくへしらぬ更なれは
人は月あかつきのつまる東の
いかなる

権中納言

それ事とおもひのあはれにたかねを
何のこしちしても月をこえつへ
我のの宮大下とまりのの門かあ
る

藤原家隆朝臣

夢のたゝちに……君なれは

春のよの夢はかりなる手枕に
かひなくたゝむ名こそおしけれ
周防内侍

思ひつゝ……
いそ……
一……
少將義孝

夕……

まつ……
子乃思ひに……
……
待賢門院安藝

人しれ……
こ……
……
……
清原元輔

思ひ……

いそくなる紀乃もかまとしふらん
天暦乃御時内にくれおはしまし
て七月七日御返りことそくに
まうで出ける女房乃中より
申ける
こよひよりハ天乃川霧たちこめて
いかなれハこゝろしらんとすらん
元輔　よみ人しらす
七夕ハ後乃今日をもたのむらん
こゝろほそきハ我身なりける

むかしをおもひにもえくゆりて眼さきはかりそ
しらるゝ
神祇伯顕仲
あさくらや君か小さきませる墨染乃
こゝろも乃袖にそ我ぬれまさる
大江匡衡
名かはりて後乃紀念と
しのふ昔をつくるよしかな
赤染衛門
このさともちうかへにしは七夕も嘆かる
あはれつゝ身乃うきましかは
右京権大夫
仁行けめにもかくれてる

こよひはしめ女房よりはしめてまかり
きける事侍らぬ御たちよ
よはひ侍らぬにか

秋風御製

いつはりとおもひなからもまつあきもなるこゝろを
おもひしるらん袖はいかにそ
後冷泉院御時花人よそ侍る
小法師ぬれかつましくれ
よみ侍る
右京有縁卿
ふるさとの花もこゝろは女車

みえんくまもあるまいし
たとへ小もとなく侍る
よみ人しらす
おもふ人のつまもとなかなかにまさる
やそとせにあまりて
人の年九つの福縫文にかきつけ
れ
人をともふかうも思ひなきつれ
いつはりにならんとすらん
よみひしなへて侍りける女のもとへ

さそはれて梅かとふくまゝ
まにかれいよゝ行の庭

四条中宮

くもゐにもかよふ心のふかゝらは
あはれとやみむきえしものを
いふかひのなき身をうきてゆくは
かる

よみ人しらす

くもの上にふかき月になる
かくしてもよそにこそあれ
親の庭にもそはむ人はた

しきしまるもとけす事にかゝ
なまへといふもこゝろへいの
ほまれの法師の夢なりや
しろの内よりいてゝなま
ひかるなる
ちはよぬくまき事と思ひ
あかし眼くへらのやとかと
くものいきとさしくるはす
よもの(?)ひてくるしみ

選子内親王

おもへともいむとていはぬことなれハ
そなたにむきてねをのミそなく

信解品の周流諸國五十餘年
といふことをよめる
神祇伯顕仲

あくかれていそちのつきはへぬれとも
ふるさとはなほそこひしかりける

即身成佛といふ事をよめる
よみ人しらす

よそのかすきしてたとへにかゝる事ハ
はしめてはなちてまよひかくる

舎利講のついてに願成佛道の
こゝろを人々よませ侍けれ
はよめる
関白前太政大臣

よろつ代にほとけのみちをもとめつゝ
こゝろのうちをまつそまかせん
左京大夫顕輔

仏のみちにこゝろのかよひてや
ましめるとをしへてる人をてらさん

常在霊鷲山の心をよみ侍る

登蓮法師

在年乃入法にも法乃ちり雲

いつゝるにはれ極く

有明乃月

本云

此一帖令校合畢可秘本

赤わや

享禄二年七月日

葉門信成在判

詞苑 全